

# 令和元年度の研究成果と次年度への課題

パリ日本人学校

## 1 今年度の研究について

今年度の研究の大きな柱を、次の四つとした。

- ①本校におけるグローバル人材育成に必要な資質・能力とは何か。
- ②探究単元の開発推進のための対話的で深い学びの実現と学級づくり。
- ③単元づくり（探究単元）のためのカリキュラムマネジメント。
- ④汎用性のある小中一貫探究単元の開発（I Bの理念を参考）。

まず、総合の時間から、探究の時間を生み出し、他教科・行事等との関連性を明らかにするため、教科横断を意識したカリキュラム作成に着手した。

①についてはI Bの視点を組み込むことにした。（文科省のI Bコンソーシアム協力校として支援をいただいた）。

②については、ICT教育の積極的な推進を図り、タブレットや書画カメラ、プロジェクターを活用し、授業効率を高めたほか、様々な授業スタイルを可能にした。それにより協働的な学びを可能にし、発表の機会を増やすことができた。

③については、すでに学校で実施してきた様々な行事等を効果的に配列し、探究科を生み出すための時数や関連性を持たせる工夫をした。同時にアウトリーチを意識し、パリ市やモンテニー市とのコラボを実現することで、人材確保、人脈の新たに構築が可能となった。

④については、小学部では「水プロジェクト」を始めることにしたが、このきっかけとなったのは一昨年来校された今上天皇陛下（当時：皇太子殿下）が4年生に「水」に関する話をされ、子どもたちが深く関心を抱いたことがきっかけである。また中学部では生き方やキャリア教育を視野に、「フランスと私」をテーマに取り組むことにした。

## 2 研究主題の設定と研究の概要

校内研究を基盤に研究主題を「**世界で活躍するグローバル人材の育成**」と設定した。

〈理由〉

- 1 日本人学校・補習校に通うグローバル人材教育の最前線にいる児童・生徒を育てる。
- 2 A G 5を推進し、海外ならではの本校の研究を発信する。
- 3 グローバル教育の研修を深め、帰国後は国内の同教育の中核となる教員を育成する。

〈概要〉

研究Ⅰ（日々の授業改革）

探究の学習がスムーズに進むよう児童生徒の資質・能力を高めるために、昨年の授業改善の研究を継続し、今年度は具体的に「わけをそえて話すことができる子ども」を育む授業づくり・改善に取り組む。

研究Ⅱ

授業や学校行事・校外学習・社会見学・施設見学などをⅠBの観点で考察する。（配列、時期、意義等）

研究Ⅲ

探究的な活動では総合的学習を核に深い学びを実現させる。

### 3 探究単元の開発に向けて

#### (1) 〈小学部「水プロジェクト」実践〉

① 全学年において一人ひとりがウエビングマップ（イメージマップ）を教師の指導のもと作った。小1・2年生は生活科の時間に身近な水環境に関心をもつためにサンカンタン池のフィールドワークをした。水辺の生き物とのふれあいを通して、水生活に関心をもった。

また、「水ちょうさたい」を結成し、生活における水の役割を調査した。具体的な生活を「水」を視点に調査することで、水の役割や存在に気づくことができた。

② 協働的な学びの中で、クラスの課題として共有するためカテゴリー分けをした。

③ 自分の課題を設定（3～6年生）。

【例】

- ・地球温暖化と水の関係
- ・水の循環の仕組み
- ・ヴェルサイユ宮殿に水を引くにはどうしたら？
- ・軟水と硬水の違い、味やでき方
- ・泥水を飲まなきゃいけない国はどうしてあるの？

④ 自分の課題について、夏休み中にフィールドワーク・調べ学習（自由課題研究）を実施した。

⑤ 調べ学習でわかったことや新たに生まれた課題を整理した。

⑥ 調べて探究したことをパワーポイントにまとめ、考察を加えた発表づくりの準備をした。

⑦ 6年生は、パワーポイントの発表に加え、水をテーマに自分の考えや思いを提言するために、ポンピドゥーセンターの現代アート見学と講習を経て、自己表現方法を学んだ。その学習を経て、自己アピール作品に取り組み、アートで表現をするという新たな探究の形を模索した。

### 【体験学習との関連性】

子どもたちは「水とわたし」を探っていくことで、その解決にあたり様々な機関がそれぞれの役割を果たしていることに気付いていった。

5年生はOECDの見学を計画したが、事前に担任が担当官と学校で取り組む「水」の課題と連携させた内容に触れていただくようお願いした。結果的に子供たちの飲み水への感心や課題は水道の供給について世界で議論されている事実を知ることになった。

6年生はユネスコを見学、災害にユネスコが大きくかかわり提言していることを知ったほか、水被害や社会の歴史についても触れることができた。

### 【発表】

学級内での発表だけでなく、共通のテーマで隣接学年同士の発表が行われた児童にとっては、大きな刺激となった。6年生は発表方法を自らが決め、学習計画を立てた。探究につなげるために、学習方法や解決方法、発表方法や提示方法など子供たちで自己演出のアイデアを出し合い、ゴールを見据え、最も効果的な方法を考えた。

## 4 〈中学部「フランスと私～卒論発表会～」実践〉

中学部では、小学部での探究学習で身に付けた力とフランスで生活していることを生かし、よりよく生きるための自分の学びを展開していくことにした。ゴールを卒論発表会の場に置き、そこに至るまでの中間発表等で軌道修正等を加える時間をもった。

### ① ねらい

- ・自分自身やまわりの社会について考えることを通して、日本はもちろん、フランスや世界の人々について学び、人として生きる意味を追究する態度を培う。
- ・各学年で探究的な学習の課程を発展的に繰り返し、課題をよりよく解決しながら、自己の生き方を考えていくための資質や能力を養う。

### ② 学びの視点

「フランスに生きる」

- ・日常生活や学校生活での気づき
- ・宿泊学習や体験学習、旅行等の経験
- ・日本や他国との比較

「自分らしく生きる」

- ・中学生までの自分の成長、経験
- ・フランス社会に生きる今の自分
- ・集団における自分の役割の意識

(各教科、特別の時間道徳、行事などと有機的に結び付けて「自己の生き方について考えを深めていく」ために教育活動を展開した)。

### ③ キャリア教育を意識した学習

キャリアとは、人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見出していく連なりや積み重ねのことである。中学生にとって、今の自分の役割を意識し、その役割を果たしながら生活することが社会とかかわることになり、そのかかわり方の人との違いが「自分らしい生き方」となっていくものと考えた。

多感なこの時期に、フランスで「生徒」「家族」「日本人」として生活していること、またその中で経験する様々な立場や役割を十分意識することができるようにしたいと考えた。

④ 個々にテーマを設定した。

【例】

- ・フランスの食
- ・フランスの働き方
- ・フランスの交通、歴史と問題点
- ・フランスと日本のペット事情

⑤ 次年度に向けて

調べ学習や課題の共有の過程から探究への道筋（フレームワーク等）を含め、一年間のゴールをしっかりと見据えていきたい。

また、校内における発表の機会を補習校や現地校（日本語クラス）や近隣の日本人学校へ広げ、ネット会議等を利用し、交流や共同で課題解決（グローバルスクエア）の機会をもちたい。